

書評 BOOK REVIEW

永田雅子〔編著〕

周産期医療と“こころ”の支援

——多様化する親子のはじまりを多職種で支える

A5判並製・誠信書房

2025年5月刊

定価3,300円（税込）

評者＝黒田美保（田園調布学園大学）



本書は、出産をめぐる環境が大きく変化する現代社会において、医療と心理、福祉の連携によって周産期の親子を支える意義と実践を、多角的に描いた一冊である。

本書の冒頭では、周産期が単に出産や育児の開始点ではなく、「親子の関係のはじまり」であり、親になる者の人生における大きな転換期であることが丁寧に描かれている。赤ちゃんが「現前にはまだ姿の見えない存在」として語りかけてくるなかで、親となる人が自身の過去や関係性と向き合い、揺れながらも「出会い」を果たすという心理的プロセスが強調される。そのプロセスに伴走するのが、周産期医療に関わる多職種の専門家たちである。

本書では、出産医療の安全性が飛躍的に向上した歴史的背景や、NICU（新生児集中治療室）の整備、カンガルーケアの導入など、医療技術の進展が親子の出会いの在り方をどう変えたかを丁寧に記述している。一方で、医療の安全性の確保にとどまらず、親子の絆や家族の心理的な回復力（レジリエンス）にまで配慮した支援の重要性も説かれている。特に印象的なのは、「出産をめぐる選択」が多様化・複雑化している現代の状況への問題提起である。高齢出産や不妊治療の普及、出生前診断の進展によって、妊娠・出産はもはや「自然な過程」ではなく、判断や決断、葛藤を伴う過程となった。子どもが「生まれる」前から、すでに「親になること」の重みと向き合わされる家族の姿が浮かび上がる。

また、母親の産後うつやマタニティブルーズといった心身のリスクについても詳述されており、周産期が家族のメンタルヘルスにとってきわめて重要で繊細な時

期であることが強調されている。そのため支援のキーワードとして「家族が何かしらのリスクを抱えているという前提に立つこと」「孤立させないこと」が挙げられているが、これはすべての支援者にとっての根本的な姿勢を問い直すものといえる。

終章では、妊娠期から子育て期に至るまでの切れ目ない支援を、地域社会全体でどう支えていくかという実践的な課題に焦点が当てられている。母子健康手帳の交付時や妊娠届出時からの対話のあり方、妊娠中の家庭訪問、出産直後からの医療機関との連携、特定妊婦への支援、そしてプレコンセプションケアの重要性まで、多様な視点から「子どもが生まれる前」からの支援体制の構築が説かれている。特に印象的なのは、「支援のタイミングを逃さない」こと、「つながりを絶やさない」ことである。支援者が「その時だけの対応」で終わらせるのではなく、地域に根ざした継続的な関係づくりを目指す視点は、現場で支援に携わる者すべてにとって極めて実践的かつ示唆的である。

本書は、医療・心理・福祉の専門職はもとより、母子保健行政、保育・教育、さらには地域で子育て家庭を支えるすべての実践者にとって必読の一冊である。親子の「はじまり」に寄り添うとはどういうことか、私たちは誰かの「はじまり」にどう立ち会えるのか——その問いに、多職種がそれぞれの立場から真摯に向き合い、つながり合いながら支援を紡いでいくための、貴重な羅針盤となる一冊である。